

権や独立は今日に至るも中国は認めようとせず、そのためこれらの辺境地方で流血の独立運動が起きてゐるのである。また満洲については、清朝を倒した後、支那は満洲まで自国の領土とみなしたのであり、後年の満洲事変に於ては満洲民族の独立と自決権を明確に否認して、満洲民族の独立を主張する日本と対立したのである。今日、満洲は「中国東北部」の名称の下に抹殺され、勿論、満洲民族の名称も消されてしまった儘である。国民党の政綱の中で注目すべき項目としては対外政策として「一切の不平等条約、例へば外人の租借地、領事裁判権、外人の関税管理権及び外人が中国領土内に於て一切の政治的権力を行使して中国の主権を侵略する如きは皆これを取消し、相互に主権を尊重する条約を改めて締結する」とうたひ、不平等条約の一方的廃棄を宣言した点で、これは後日「革命外交」として展開されることになる。

以上の宣言案もボロチンの起草に成るもので、ここに現はれた三民主義は第三インター乃至中共の革命理論と孫文の革命理論との最大公約数であると云はれてゐる。

第三節 中共の陰謀と国共対立

共産党早くも策動

国共合作で国民党に加入した共産党員は、忽ちその正体を現はし、国民党を分裂破壊せしめる陰謀を企てた。共産党は週刊機関紙「嚮導」や書籍・雑誌によつてマルクス主義を宣伝し、浸透工作を進め、次いで切崩しのため国民党内部で「左派」「右派」「中間派」などの名称をでつち上げ「革命のために左傾せよ」と云ふスローガンを掲げ

て挑発離間に狂奔した。

共産党による国民党赤化工作を指揮してゐたのは、云ふまでもなく国民党顧問ボロチンであつた。赤化の魔手は黄埔軍官学校にも伸びてきた。ボロチンは先づ、軍官学校学生を切崩し、更に学校も乗っ取らうと企てたのである。当時、軍官学校校長であつた蔣介石は次の如く書いてゐる。

「一九二五年一月二十五日、共産分子は『青年軍人連合会』を結成して軍官学校と各部隊内の両党かけ持ち分子を吸収したばかりでなく、私自身までも共産党に入つたせ云ふデマを飛ばして、軍官学校学生の抱込みに狂奔してゐた。そこで軍官学校の学生と部隊将兵のうち三民主義と国民党に忠誠を誓つてゐる者は、連合会の圧迫にたまりかね、遂に陳誠を中心として『孫文主義学会』を結成し、これに対抗した」（『中国のなかのソ連』）。

国共合作からわづか一年後の一九二五年初頭、共産党は「国民党内工作決議案」なる秘密決議案を全党員に指令した。その要点とは

- ① 国民党各党部を共産党の団体活動機関と認定し、これを通じて、全力を挙げて我が党（共産党）の国民党利用の目的を達成すること。
- ② 国民党左派、即ち親共産派の汪精衛、廖仲愷らに対しては、慎重な態度を以て接触し、追々純粹の共産党員化すること。
- ③ 国内実力派と国民党との提携を打破すること。
- ④ ソ連以外の国家と国民党との間に親善關係が発生するのを妨害せよ。
- ⑤ 国民党員及び一般民衆に暗示を与へて、三民主義を懷疑し、批判するの風を起すこと。
- ⑥ 社会組織の中核に潜入し、社会の現状を破壊すること。
- ⑦ 国民党の労働者生活改良の計画を破壊すること。
- ⑧ 北京その他各地の学生總會に潜入し、これを我が党の活動利用機関とすること。

是に由りて之を觀れば、国共合作が完全なる幻想であつたことは一点の疑ひもないであらう。心ある国民党員は共産党の下心を警戒したが、孫文はあくまでも共産党に対する信頼を崩さず、合作に踏切つたのであつた。共産主義に対する樂觀論の結果がどんな破滅的結果を己れ自身にもたらすことになるか、我々はその実例を第一次国共合作に於ける孫文の態度の中に見出すことができるのである。この共産主義に対する盲信こそ新生中国の犯した最大の過誤であり、一九二〇年代以降の極東に於ける不幸な混乱と戦争の全ては、この中国（あるいは孫文）の誤算から出たものと云つてよい。

孫文、客死す

一九二四年十一月十日、孫文は「北上宣言」を發して不平等条約の廢棄と国民會議の招集を呼びかけた。そして、広東軍政府と和解して和平裡に支那統一を圖らうと云ふ北方派の段祺瑞、張作霖らの申し入れに應じて北京に向ふことになつた。孫文北上の真意は何であつたらうか。ある国民党員の言では、孫文はこの時すでに広東を見棄てたのであると云ふ。孫文は共産党に廂を貸して母屋を侵されてしまつた。広東の赤化に処してはじめて容共の大錯誤であつたことを自覺して、これの転換を求めため北京政權との連携をさへ企圖して北上したもので、その際、多数の反共派の黨員が彼の後を追うたのも、聊かこれと符節を合はせたものであつた、との見方をする論者もある（古川曉村「近代支那外交秘録」）。

広東から北京へ向ふ途中、孫文は神戸に十日間滞在し、その間、十一月二十八日に神戸高等女学校で有名な「大アジア主義」の講演を行なつた。離日後、十二月上旬、天津に着いた孫文は病を發し、翌一九二五年三月十二日、薬石効なく北京に客死した。肝臓癌であつた。享年六十。

孫文は死の前日、汪精衛の起草した二通の遺言状に署名し、更にその臨終にあたり、墓陵を南京の紫金山に指定

した。

二通の遺書のうちの一つは「現在、革命なほ未だ成功するに至らず。凡そ我同志は、須く余の著す所の建国方略、建国大綱、三民主義及第一次全国代表大会の宣言により継続努力し、以てこれが貫徹を期すべし。最近の主義たる国民會議の開催及不平等条約の廢除は、殊に最短期間に於てこれを実現するを要す。これ遺囑するところなり」と結ばれた国民党員への遺囑であり、他は家族への遺書であつた。

また、これら二通の遺書とは別に「ソヴィエト社会主義共和国連邦中央執行委員会」に宛てた「第三の遺書」が孫文死後、支那とソ連双方で發表された。それは「……余はすでに国民党に諸君との提携を永久に継続すべきことを命じた。余は諸君の政府もまた従来我国に与へられたる援助を必ず継続するであらうことを深く信ずる。……『ソヴィエト』連邦は良友として、また盟国として独立強盛なる中国を歓迎し、両国は世界被圧迫民族の自由を争ふ大戦中にあつて、携手並進して以て勝利を獲得するであらうことを余は確信する。謹んで兄弟の誼を以て諸君の平安を祝ふ」としてソ連と中国との永久の提携を書き遺したものである。

この「第三の遺書」は孫文の死の前日、英文秘書の陳友仁（国民党左派）が突然持ち出して、宋子文（孫文夫人・宋慶齡の弟）が読み上げたと云はれてゐる。英文で書かれており、陳とボロチンがひそかに起草したものとされてゐる。しかし、前記二通の遺書とは違ひ、同志達の検討を経て居らず、従つて孫文はこれに署名してゐないのである。国民党側では、これを孫文の遺書とは認めてゐない。孫文の死を利用したコミンテルンの悪質な策謀とみるべきものである。

共産党「母屋」を取る

話は前後するが、孫文が北京に入ると、先に広州を離れて北京に集つてゐた馮自由らの反共派は、俄然活発に動

き出し共産党排除を孫文に要求した。また、同じく北京に集った謝持、張継らの右派は、一九二五年三月、他の右派と合同して「国民党同志倶楽部」を組織し、孫文の死を前にした三月八日、次の如き「共産党排斥宣言」を発表した。

「……党には一定の主義政綱があり、党員は同一の旗の下に力を合はせて国家に尽すべきである。然るに共産党は総理を欺き、国民党に帰依すると称しながら、実は我が党の名を利用して自党の発展を図り、我が党を破壊してゐる。彼等はソ連から運動費を受け、青年を買収し、労働者を欺いてゐる。彼等は全く我が党の不利を図り、外蒙放棄を唱へてソ連の傀儡となり、党務を阻害し、最大多数の同志を反革命、非党人とのしり、党を赤化しようとしてゐる。三民主義と共産主義とは決して同伴し得るものではない。……」（大久保前掲書）

この共産党排斥宣言の内容が事実たることは、既述した共産党の秘密指令「国民党内工作決議案」が歴然と証明するところであつたが、広東派はこれに対して強硬な態度に出た。即ち孫文に同行して北京に居た国民党左派の汪精衛らは、直ちに馮自由以下三百二十名の党籍剝奪を公表したのである。斯うした左右の対立抗争の最中に孫文は客死したのであつた。

孫文の死によつて、国民党の左右両派の対立は決定的となつた。共産分子は孫文の死を、国民党を分裂せしめる絶好の機となし、コミンテルンとボロヂンの指導の下に、孫文亡きあとの国民党を「左派」「中間派」「右派」に分裂させ、内部抗争に乗じて党の主導権を掌握せんとした。その共産党の計画は

〈第一段階〉国民党左派及び中間派と連合して右派を攻撃する。

〈第二段階〉右派を打倒したあと、左派を新右派として攻撃する。

〈第三段階〉新右派を打倒したあと中間派を攻撃の対象とする。

の三段階から成るものであつた（『蒋介石秘録』6）。

一九二五年七月一日、大元帥府を改めて国民政府を設け、主席にはボロヂンの意向を反映して左派の汪精衛が選

ばれた（国民党軍も国民革命軍と改称された）。この年十二月、林森らの反共派は北京の西山碧雲寺に集り、反共宣言を発表した。この会議を世に西山会議と云ひ、参加者を西山会議派と呼んでゐる。その主な決議事項は次の通り。

① 譚平山、李大釗、毛沢東ら九人の共産党員の国民党籍剝奪。

② ボロヂンの解雇。

③ 汪精衛の党籍を六カ月間停止。

かくして国民党は「西山会議派」と「広州派」とに分裂する危機を迎へた。翌一九二六年一月一日には広州で国民党第二次全国代表大会（二全大会）が開かれたが、これはすでに共産党員が意の儘に操るところとなつてゐた。されば、共産党がリードするまま、「西山会議弾劾決議案」が上程、可決されたほか、党の主要ポストを共産党員が占め、「中国国民党の指導機構は、ほぼ共産党員の手中に落ちた。国民党に寄生した彼等は、遂に“廂”から“母屋”までを乗つ取つたのである」（『蒋介石秘録』7）。この大会では、最早「三民主義」の四文字すら口にする者もなく、逆に「三民主義」を持ち出すと、大会はこれを“大逆不道”とみなす程の雰囲気であつたと云ふ。

蔣台頭、北伐へ

蒋介石が北伐を最初に公けに主張したのは二全大会に於てであつた。大会閉会后、ボロヂンが突然モスクワに召還され、その後を継いでキサンカなる人物がソ連軍事顧問団団長になるや、北伐必敗論を主張し、公然と北伐計画を妨害しはじめたのであつた。何故共産党は北伐に反対したのか。中共とソ連が蔣の北伐に反対したのは、北伐が成功した暁に、蒋介石の声望と実力が圧倒的に高まることを恐れたからであつた。まだ中共が独自の軍隊を持つてゐない今日に於ては、北伐の成果はすべて国民党に帰し、その結果、国民党は打倒し難い程の大きな存在になつてしまふ——このことが彼等の憂慮であつた。それ故、紅軍を組織するまでは、何としても蒋介石の北伐を阻止する

必要があつたわけである（蒼沼洋「中国革命四十年」）。二全大会以後に表面化してきた「蒋介石追ひ落とし」は、「北伐阻止」と表裏一体の意味をもつものであつた。

蔣が共産党を押へて、北伐を決意したのは、一九二六年三月の中山艦事件が契機であつた。これは海軍局長代理・李之竜（共産黨員）を中心とする共産党の陰謀で、蒋介石の乗用艦中山号を偽の命令で動かして、蒋介石を中山号に誘込み、ソ連に連行して始末せんとする策動であつた。これに気づいた蔣は直ちに戒厳令を布告、李をはじめ軍部と党内の代表的共産分子を逮捕し、軍を以て中山号を奪還したのみならず、事件の背後に居るキサンカ等ロシア人顧問団の一部を解任し、ソ連に帰国させたのであつた。国民党左派の領袖汪精衛は、事件後の五月、ひそかに広州を去つて病氣治療と称してフランスに向かつた。

中山艦事件を転機として、蒋介石と共産党・国民党左派の関係は急速に悪化した。同時に、共産党の広州基地奪取の陰謀を挫折せしめ、左派の領袖・汪が外遊に出た結果、軍を背景にした蔣の地位は高まつた。蔣は中央に対して北伐を建議し、これを中央は受け入れた。軍事委員会主席に推挙された蔣は、六月には国民政府から国民革命軍総司令に任命された。かくして北伐計画は急速に発展し、一九二六年七月一日、国民政府軍事委員会は北伐軍動員令を布告、八軍十萬の軍隊が進発の態勢を整へたのである。

第九章 赤色支那への対応